

3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9



道德問答

藏書  
印

明徳と云ふ所謂心也是心是於世に済出云  
の事か神儒佛三道教化異りとは是  
以此地をアラウの事あるを言語文字云  
及ふ前とそんあうとれの事に有る他無事  
ナリ此をあうか言や實に我師生國尾川  
知多郡名和村の農人達

白川公之御門人となり同國豊知郡古井村へ

八幡宮仕人となり小堀俊高別と若来  
其先

南帝に奉仕兜鳴傳後二帝高利の本孫世の若翁  
不位農人を代へ富士山自山立山へ禪定  
す高川し文にゆき同禪定に三度  
高剛若生す道小入るが志者や衆々與る  
事若和村のを夫某と數く詣るす有師初  
日天に行而ヒトヒトナリルアハシムケンヒト  
照廣大無邊ナリルナリスニハ小間袖職内  
者アリヨ守めシスヒト、ヒ意と得るの論也  
爰にれおも初而自得ノムハ理もアリ強も

農業代辟行脚代願ふとくと兩親文  
不見あはんヒトヒトシテ御の取と役  
竊不常位坐臥工夫無間断或ミテは父母  
轉時ヒトヒト入或ミテは農業代  
ヒトヒト同塵沙學代曾而書藉文字不見  
只爰爰ヒトヒト進ヒ苦行年有アリして  
大不和光同塵たゞ觀得候事歟有  
孤不見中ヒトヒト沙超迹し而是非の如キ  
迷戯ヒ又神佛之靈夢ヒトヒ常不加持  
祈禱修一萬人の疾痛と助而以きア

入るが如く其にあつては遂にす  
年有り切々惜哉大道の要と空すま  
所か數々聞所と往來記して師切々  
文字と書するべく故に其論は事甚恩に  
似て意得て素直に是が事も勝て某古  
れらしくて師の意よたて事のあらうと  
めうと之を初學是よりニモともも權を  
意て端的道に入り一助不處ん云爾

于時文化十年中春門人書之

○神佛へ祈願、トテモ願主に依る利生者武  
神化によつて利生有武祈願と稱せむ行者  
徳によつて利生者氣師の云利生の事等  
あるる理屈ふるひにて、畢竟言ふ  
ひと文字まと謂ひへて、神佛ハ無念の  
無心なり故に反らず、心外の事無  
色無心の尊き能なり、能く利生といふが天  
地に心中すと申し只無念の大である  
と申す利生なり言ふにあらずと只あり  
かく、とたゞ人アヤリ利生厚し

なほよかに  
新て之を  
かくらむ

行  
見  
事  
の  
は  
一  
聲

○おまへ神佛よりの有りての事も神佛に之を  
あらがひてある師の云誠の神佛とす是  
の神仏はとさかどひと及ぼばず御傳とす者れ  
心とたゞぬるを文字と見る神主（ハシマサ）書く神  
少しある事無くたゞめぞ獨り人（ハシマサ）是  
覺えぬる山中なる御心（ハシマサ）天然の心也是  
め人あり極ての善人よからず善心の者集り更食  
思ひの者集り小人よからず皆ひとぞ其事も博衆と

ゆむとひは盜賊のまみを集り寄ケレド其方  
之へに薦スルてたる者有事アリ其道トコロノ  
なま寢スルと云ハシメテ勅ツクシ者すべし善ハシメテ惡ハシメテ戒ハシメテ  
老ハシメテ少ハシメテ死ハシメテ生ハシメテ之ハシメテ之ハシメテ誘ハシメテにハシメテ神ハシメテ社ハシメテ眞ハシメテ

予之行，願補佛乘。此如也。一切凡夫。

敢而問焉。うつ所を思ひ人少人往人の道社人不  
神弘も其子すなは傳とよきめ野詩とよきてたる  
ことにはあらまてて后給ふ外師のえ前よりと云通

神佛無念のすゑに罪をもて思ひが利生と  
かくよもか根奉申と言葉に難言れ  
先々罰とせ生れ我より合戻まつて俗人  
社人でも僧山伏にてむかひ多  
少人後人若きちまつてとくのくわ  
善人多善心の者等相五方に罪障消滅し皆  
刻く因縁因果不不知れ是承教忍法事  
う被惡言邪氣もなきも心病といふとゆ  
名用失利すとぞ怨敵有す敵とは  
只ねづく六根清淨を願ひ

成就をいたり。少人多大爲人。事裏はあ  
れの心が欲る所のみ友と導か。因縁  
爾えども是琳善惡名利名歎にはあ  
大切のな、五體と称し。此の感  
天地の御恩と謝。日天の光明と慈と深く  
世にうる立者とあらぬ。何ぞ神佛また  
あらむ給ふ。如何ぞ利益多きとす。我經よ  
云補へ正直の首に厚き。餘

伊勢

天照皇天神宮ニ伊弉諾尊伊弉冉母ノル乃  
渟女ノハル則今ノ日天ありトアムル初安  
後日輪ニ化テ天上ト給ヒタラ主師ノ因左  
ナリ是大事の口安也モ信ひ之爲に語  
右ナシモニ也ヒタラ先此世返の地神云々有而  
ナリヤ次ニハスニ伊弉ニ御鎮座スル也モ  
天照皇天神宮ニム可奉仰共ノム私モジト  
ナリハ急急多方も事ニムナシモ日輪ニ地  
國辟ノ日輪ナリ別天照也大神ニシ奉鳴伊弉  
天照皇天神宮ニ全モリニテ顯然ニ御應

海モ野州ニ

天照皇天神宮也モノの論ハ別て吉皮と云ひ  
物ノ先萬物先ヨリハノミニテ御祖也モ  
既ニハソニ事ナリモニニコト能合志トテ安  
テ地モダムシテ有ム陽氣ニ性天登リ日光  
菩薩ヒト天照皇天神也奉唱是日滿也  
是火ノ神ニ陽神也神儒佛ニ三道に依ム  
ソニ唱ヒハカムニ其唱ヒニ丸括シテ  
ナシヘモ伊弉諾尊伊弉冉ニシテ傳ヒ  
女三男と産スルノ一女則

天照大神宮は是人體の神。是陰神。此神れ  
心徳と日光菩薩の心徳と二神一心同時同混して  
此世鬼ばかり小徳光もりやかくを存す。とめ  
兩神の神徳にて日本と唐土も天籟地門と  
海のみえ。山のみあゆ。書寫夜あり。而  
天の日光菩薩の。也。地の天照大神宮の。也。ハ  
もろわに。也。天照大神宮の。也。ハ  
天の日光菩薩の。也。ヨリ。左を珍。右を辟言。と見て  
ナガシカキ。只是合鏡の。左の鏡。右の鏡の  
左の鏡。右の鏡の。也。ヨリ。左を珍。右を

佛法ハ天せより垂れ而今ニ毎日の奉事者有り  
八宗九宗の源ハ釋迦也或人の手に文殊菩薩  
觀音釋尊ノリも高徳にて者有く能有りと  
云々文ある全ノイ佛法ニトムアツク根元  
法在也師の曰佛道ニヤハ根也また法苑ニ云  
文殊ニシテなどなんどと妄想を起すと顯れ  
して盡未來歲無くて有る所なれどと  
根もよろは生死口宣アリとあらうと素す  
風空火水地のあつめとのたる事とヒラバ  
貴きも賤ト先きもとより病わらうと知らば

生ハ我およ難モシビんモ誠の忠誠の孝節生を  
冥くナリ況や凡モ切ガムアムニム冥く晴  
たる室中ノ皇明く明くナリ至極能稱ミトハ観  
音ヒロヤ文字で乃モキモト一盃死ミト一盃  
切ヨミヒキテシバウテキシテシナモトミヒ  
スムさればモヒタヒタムト云ハシムナテキス  
少寶と見ルナリハシタヒタムト金剛力士也  
然ヘ直ニ足と觀音是と殊陀是と文殊が  
渾々諸仏諸菩薩の名付親王成也釋尊ナリ

もむしよ尚金有持也すニム日天のむりう  
天照白玉大神宮室のむり釋迦ナム神ミ一  
有の縁あつて頭ですべひま狹有佛、無縁有  
て形と離すく狹有神、表列佛、裏に有無  
ノモ。とがんでんやどもととてんやんたの羽の  
ナキ全神菩薩申ハケレモナ。同モ  
見ハシ神道もいせ。家とハ佛道レセ  
顯モハ儒道もあせ。天地每  
カモヤマ。ヨリナトウ助ヒ生ヒモと菩薩恩ミ  
菩薩云次アレセモトヒトと酒食也ト

トモコレも其意味と辟言ヘタリル  
金石も石もうち合と火めどもどく只有う無う  
顯もだくと權現も浮よ名々くと足則國事  
ナリ是毗盧遮那佛へ先此形取リテ云今云形  
の顯ナリトナリシ也。素ナリ天地ノ形  
ナリミハソミヒ正無道存ひ是モと切りに形と  
シモ本末ハ菩薩權現一體無方別也。故ニ  
權現顯也。テテ天地の智恵也。日天於  
天地の慈悲の徳、國土も顯モ菩提の宝真室  
寶有と彰善の光、惡十承惡の光の善と歎

徳の光ハ位を成神の心ハ佛と取ヒ佛の火ハ神と  
影本覺本有の如来ハ荒神も顯る是が舊傳は  
徳より出歟。是より上下善惡やう二國ニ過  
たれりよ生をう。本来菩薩も唱る佛言をう。  
蒙サウたゞまく日本唐土も唱ゆ。徳より出  
るの仰御り。唱ゆ。専心さう。徳より出るの  
初となり。終もな。文字。執事して。諦の菩薩。モナリモアヒトモ。之  
文字。執事して。諦の菩薩。モナリモアヒトモ。之  
今世より。邊鄙のみ。飯と菩薩と云をせん。

」

廻し右言をう。うと市中に居。○  
右され。寺を。かへり。にねと。一。流の東北の  
地より。すり。まか。風を。云歩。邊鄙の土より  
鳥流。鳥の流行を。のと。よと。ヤ。左ア  
古凡古言を。あくの。こう。すき。思行して。律儀  
な。も。との。な。別

○儒道唐土より發而今海日。やまと連綿た  
儒との根元と云ハ。氣の。氣師の。神儒  
佛三道一致の論を。や。是三教化  
古云葉ハ。かよ。と。と。は。の。誠の。通入。と。お

理ナムヘモナリ。アキラム儒者ナレトビ  
徳の勝劣と漏も後ニハ、始て神の神徳  
佛徳ル幸トテ、儒ノ羅及所々本末儒を  
比根元ミテハ、天地人のニツ一體ナル事ト感得シ  
是とガ文字言葉に表ヘ上

天子より下万民ナリ。其教と立陰陽の初  
カネト人ノ人たる道と明、ヤセムの儒ナリ  
故小神佛のあ道、辦理歟。德歟。討シテ、儒モ  
サヘ。凡異國ナリ。日本ニシムヘトドリ  
磨くひ名者大將儒ノミ全始終よ勝利得

乱世と治リヨリ、國ノ事、竟寧安泰孔  
祈願と祭り、福利とひもと云ヒトミテ、儒治世  
道具ツミト云。神佛ノ治ルトナリテ、不  
辦理妙徳、現行ナリ。いふも、其尊徳ナ  
ナリ。アキラム、トナリ。ても日本ニシムヘ  
タキミ理歟。神仏の他力と自力を合併の速  
國代治家と云。の、度のとく程につき  
自力と行。もの少ニアヘンバトトキナヤモ  
ウキモアモビ

東照宮或ノ太田原城地雨露の降り、和の

戰場へ軍陣としをもととすと、もひる  
程以ひ矣な。是神仏の他力と自力と合併の妙  
理。雖徳く甲斐の信玄やと勝てても、安傑智深  
大の戦場か殊磨の功あらず。而神仏の他力と  
云得也。専程小法事は自力と却まうの  
大なる下向の首先こそむれど、かくも之を  
討罪罰へ是儒の及ぶる事無前にはありせらる  
云明なり。其儒きの數り、全麻衣者有不  
理とぞ。ひめゆるあても御肩ぎて至る  
是と云は元是小寺をえらびます。

大賢人ミトシがうつて居、孟子モウツがモウツ天の討と殊タガ  
と用ヨウめ。君と殺スルとも聞スルべからざの理リにつきす  
天罪テンザイの教諭キョウイフあり。先セン天テン無ムカシとの封王ボウウ一夫イチフと  
そし馬鹿マハラと宋コンともすりたまなきも殷インの天子テンシに  
相遠シヤウ。武王ムウウ其ヒ下シタの諸侯ツクニ臣スルなり聖人セイジンの名メイ  
磨マサニ。水晶スイジンの、アヒル行スル聖人セイジン。武夷ムイ  
惡アキすそとの故コト。以シ一夫イチフの討スル。小理コリ。臣スルと  
踏ミへにて是シと云ス。天子テンシとす。無ムカシ能シ。能シ哉カ哉カ  
少シ少シ儒者ルツの。ヤマヅレヤマヅレも物モノうち大切タケル。一イチ覲クニ  
す。かづきの大羅オオロと種シキ詠謗ヨウボウ者モノ。たゞ今イマ

自身の愚痴と凡意曉ゆるへ武王の紂王とて  
天子より釋尊の西親とて遂に所詠  
及ぶハ理に附き色り衆中れ必定よ合ひよ  
爰とひとも勤考をなす極儒道の業うこした  
右般やとく理とぞしてあらわす國ゆ  
理とぞしては今伏羲堯舜にも孔子ふ  
せよかたよち聖人もどう天ニツの天め  
地か二ツの地根力さにニツのやまと  
初而發ら發らまし元とどいまニ天地人一體ある  
事ば不發明故よ父子君臣といふもすあは夫婦

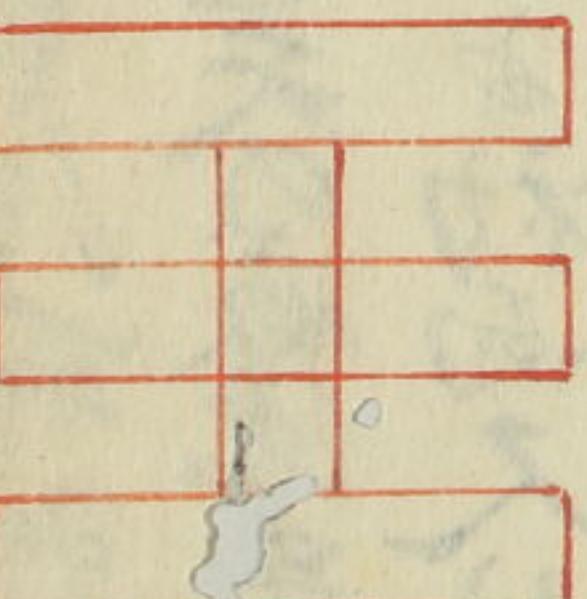
忠孝仁義礼智信もよもやく只よもじにいふ  
渾くモトもよもじにいひ法則なるもよびの  
用ばなもありすく所<sup>根</sup>辟てアハ矢も水も鍋も  
とよ是と三ツのまゝ同邊一體にて煮て食ひ<sup>ム</sup>  
事とあざむがアノ所に芳ばず牧羊する  
忽然とアキ終に天地人一體なるひと大ひア  
觀得ほそりと直す以其まゝすばにうつせバ

天

人

地

一體



是色空一體  
魚主別也爰  
天地同源方物  
一體表人

如斯ナビトリ初の程キテアシニ所則陰陽  
合體入我、弘入其身。父母我也天の威懾且崩  
父之地の威懾尊ニテ母之姿、小れアモ初而入六方物の  
靈天地の寶カム則天地人道ハナリ天地養  
事ヒ大ハ將入

■是と文字書シ阿吽の波シ  
義王ニ讀■是ナリ理殊幾く理と表シ文字篆  
子ナラニシ父母よ近久シ孝と若月上下君臣多寛遠  
ニ為名夫婦と喝食是と仁是と義是とれどと知  
伏信ヨウノ元一叶公神ノテ教ヒ云ヒ立  
ゆえノ人ノ人ノ多シ也テうんとまも徳送の根

元也敢而問かう。右墨  
モソシテ父子君臣忠孝仁義  
禮智信ニエガ奉事ハ曰其道へあれ  
事事ハシムトキアリカ  
父子君臣忠孝仁義禮智信  
ヒノハシムトキアリカ  
教ヒ立人句口渾ヒモトキモトキ  
事事ハシムトキアリカ  
シ行ヒ天、地、山、水、火、風、雷、電、  
ごく、山、水、火、風、雷、電、  
ナリトキハシムトキアリカ  
儒道ナリシ無極ナリ大極ナリ所ニ視  
師の云儒書に無極ナリて太極ニナリて一氣也

太極の姿ぢやれ圖をやと歴々の儒者をもさし  
トもんじよとくと是を全く理より失ふべ  
きと論ゆ。真銅勝負びあふ所あくま盡る  
心の徳の爲り理の徳のみに偏り重んれ方端實  
意も虚も故ニ道を混雜してよしに  
かまく無極として太極なり。又佛を  
くまく混じて此儒との根元が前半も後半  
元一切景きく姿形意識と以て義法則を立  
人の人も人からくとソムのもの。此が事は  
事ハ前後もと今日はつくり理が引みられ

無極の圖をやの太極の弓矢やのと程を勧め得  
猶てのうすがく不自立あるもの。年七八  
上根の志有。高興す。よのよすよ心の増長  
儒の奉辨。そりちも。文字せん。或モ  
かくちなに。入刺今。の傷と。私と。とも。かく  
佛言。と。の。傳。も。育。と。右段。と。所。代  
神儒佛三道の根元と能く耳に留極筆のす  
まことに達。と。も。歴。く。かく。もう。用。た。尾。  
某を書物。す。ま。かく。文字。す。ま。け。かく。  
かく。よ。こ。そ。の。根。元。と。語。と。そ。う。ひ。に。こ。な。し。

三道の尊徳たるを小初より見えて有り  
事はよしと申すを今日と云ふ事  
あるとて序時と見てゐるに疑ひと  
有り大車に守り候と先に移りと  
よしむと増しての諸事が及んで利  
○易道の根元より、其所にしやが孔子の學  
數年とて、易と學すの大半過るか  
のうへ聖人として既に之れより從事し  
たので容易な事あり顯然であると  
右聖人大もと形る。とての事と會津源氏

易道の根元は、いかに所より凡ての力也。則  
ち亦も及と云ふも今流動の所の易者を  
論かのうから、師の易道の根元より  
無而有云々源之所人を易は偽そぞり出で  
どもそれと本來偽そぞり教導矣くとて是  
偽そぞりは道を入るよりとされ聖人篇是  
ミシテ易そぞり名自世ふり。然ひ上を  
天子より下可民よりすてたのと敬むと  
義の法則とすとつまむあんどの今すき  
道をとすと此易によつて理を行はずと解

兩道ゆきまつ佛との滝土地獄の浦とみかみせり  
り地獄の浦も有りてものなり是根元藏がれ  
不執著として書物を以究理也而少しく我と  
うりしふともじめ心め狹けれと左肩眼に  
實入り口先がや角りて刻根小篆既上と  
なすさむれやねとこれ慢心天狗と云叶書物  
とよすよすがちあと凡心とみしよと凡心が瀧也  
紫雲蓮華地獄と闇、燐魔赤白の鬼卒耳に  
障りしゆくも氣乞ひあらと云々凡情なり矣  
本覺寺有都高天原明德と口にいふと

すうちも身の内よりはとらへてもかくもかからず  
がくせれ事へ來りて幸せこそひ節はすへ猶  
あつた。而して學道として魔禦不羈入  
る所でモ残念之なきどもとて幸いする事ふ  
に。又解師と名んじてありて人子を又古  
あゝ色三國三才道より教異之言  
一理なりあつと日本天皇ハ神仏の他力者と  
あらわ誠の子にゆんももゆのあとに。而以  
あゝ苦行廣大ゆて自化の力と成就し  
度とハ元神弘力と云ふ事之が先秦者所の

姿形より即ち國府神仏の他力者と爲  
の國と日本天皇とま矣。はよひせきがくの聖人  
をうそと日本天皇の聖人をあざむねまく立禪  
をうそと斗争して子路禪へんとまくとゆきて  
其禪の理と解とさとゆの都。爰々教えまし  
たとての高論有とお及ぶ爲めもほんと  
其程代凡此流と汲み十九重育心と并張  
北山と願ひて遠て神仏と并びと口表向ひ  
禮とかくものとひもひとね。ふはけ。然す  
はくは是自化の力と云ふ會津の意とす

さる浮う有り也。無事のあし日本で奉乳等  
同様の聖人如是の事有り候に似たり。御事  
久々きらりハナヨリ御んとおまめられれ  
やう。され候ふのそなまゆと若きとて  
歟。神徳佛德の廣大さも及とてのみ  
化力顯然とあらはす。神りとも、いづれかと  
くらりやく一人づり二人三つて人禱うと  
する。おあはぬ事のことを禱うと。とる  
是神佛合體無事の事。天の命當てと  
おもひし敬てと敬仰を行ぞ人の禱うと

シムとを主や。、のうがえと申うて  
ハ補佛の二國にしかあらず。わざ  
孔子があらうと存せらる。せんじてはる  
大聖人へあづれども。およこす事無  
自力のみなり。大いなる恩恵にあつては主と  
殺し天子とあつておもむ意。日本ハ  
天照自皇大神宮以来がまう御代  
爰ど。おと日奉唐土。おと泥の達ひ。おと  
おと。孔子神父の二國おまことだく時  
神のみ化力おもとては大聖人。右禱の事は

ソラ語、手方にツル孔子の門徒あらば門人  
孔子の傳すてある事と見ゆる。孔門守哲  
方うらむすがぞれと書れまよ。序文と  
是ひの意自力の國よりぬかりをあらはし  
孔子上とある天聖人。日本の中をド、蒙而と  
敬する事か。傳承して西五代の禱りたる  
礼智信と先行まともとと勵行。又  
おうじと神佛の他力ハ禱願とも。禱願あま  
だる事。今之唐天竺から。僧本ハ古代も今も

○右申りあり。人の人なり。あへらば。左  
○醫の根元とトム。専諸病と治すに有其諸病と  
治すきの根元ふ。ハレ。けり。師の大將軍が大  
天地と治す事と醫の小天地と治す事。又大軍  
の心に有る能く。と於天際。小天地。の時  
士率風に草られ。能く城内治り。安泰を安  
泰とヒ。至遠の座居と。も。野心の。もの  
立所と為。殊々金。慰。て。シ。事  
勢在。世。天意根本と。金。先。五臓。

六腑との心鏡にてしてまことに誰とも云  
ひゆゑ天十五性の神有り人主靈の神有り  
五性五色の理と以春夏秋冬にあらざるて療法  
化はれどもあらじて氣を力病の元よりと以  
天子より下万民までと共に病とやまを多  
万化されば病と見定す事無しとせむと云ふ  
良藥却而毒藥となり病と治ち難いが如モ  
萬事と云ふ事ありを右所位の事也事  
物相合て方々とし性古もとよと名醫がヨリ  
出能くの醫書をほ山に有爲一末世と見ゆ

實よりとくとくとくとくとくとくとくとく  
實その根本五性五勝ともよと云ふ事に云ひ  
一氣並て取る所も云ふ所と以て云ふ所と  
云ふ所と云ふ根本と云は本と云は事も時も  
病人と云て其所の如某の死ゆハ、すばに左  
と右立派に療治する所と云ふ所と十数ヶ  
月もとくつとくとくとくとくとくとくとくと  
云ふ所と見ゆ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
の云ふ所と見ゆ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と見ゆ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

よしと殺氣をもつて、まよひそとて、まよひと殺氣をもつて  
ほづくもづくとて、まよひと殺氣をもつて、まよひと殺氣をもつて  
自由自在の變化を療法出来るものあり  
病氣と死靈と生靈の障礙有り、治古と善書ある  
者有り、而ものすゝむ有り、者死靈と生靈の障礙  
あり、生靈と死靈と、有り、而ものすゝむ有り、  
而りあらわせ無縁にて、生靈と死靈と、有り、  
まよひと向て相手有て心意の不すとあると  
して、死きる者必終かと一命と奪ふものあり

其上大妻アリ者ヒトハ、それ、シテ、キモトヨ、惡死邪  
神トナリ、永く其家の害となし、ヒトモナリ、  
戰國或凶年之後、必報、為流り、キモトモナリ、  
是、戰死、亂死、凶風災、教化窮屈、疫と霧々々  
立ヒトモナリ、也、疫神邪神トナリ、ヒトモナリ、  
今時流行の風邪、ヒトモナリ、疫鬼の風邪  
ヒトモナリ、又厄鬼ト云、トホホ、厄鬼  
トホホ、厄鬼ト云ハ、凡人ハ、死にのび、必死のまゝ  
も、も體半ば死傷するものあり。

一念外右残す一念外死是よりを假す  
念をやのいうのをもやのよき漏れ只善惡を  
のうち一ふる死是となすがよてをゆくの盡を  
多く者もそのも是をすくはせふゆけに  
縁は必ず障りとする所これを死ふがよてを  
すむ豪傑の夷士がと善惡の差別がくま  
一念外在とこもり者死してハ生きてハ  
死してハ生きて終りともとまくめ  
ナシそれの者とすがふるをもをゆか  
猶か居るよりも障りとすれやうなふ

事ハ勿く勿論亂世にすむ有り治世に至て禍根  
よりこそ數萬人のうち一人有りと云ひて此死  
是ハ種と才量あり生是と云ハ右仕なし道をも  
いとぞ其者大半に難治とすれ死又之  
多きと云ふ事ハ勿く大半に死つてゐる邊納と  
多死されて是とゆづれにいとねらむ者すと  
又常心中に死しとゆづれにいとねらむ者すと  
病苦の氣難治すと云は國粹也者と云は直に  
そとく來すとゆども家業かじと不持、筋骨を  
いとゆとまし一ひとと其者至て難治病苦せ

うかうりは心有らぬも大審にれ事ある  
うは是不向の者自び一來害とて皆無風  
とうおもむきもむほとてま雨水の極まる  
低もくへ居るがごとく雨水にゆきしもくを  
向たる時其死更生夏の降とハシモウカ  
師の徳有人ノ歎悔とソリ一寔のことそひ  
ミヒニトに入り又我體中の千万億劫と  
行者の行徳とみ爲ますとへ速くに變じ  
簾は降り又同居の右ノウリ有る人を  
醫の療治の爲と全般セヨリ甚矣師の云

死靈生靈と仰命と奪ひゆのとすれ候  
或き諸病小障と仰今流布モ慶黙然の癪  
教戒と其家に仰ぞめりゆくはいと見えぬ  
すといふ家の主の爲めんとまく前のう  
と仰はほめしとを死更生夏の命と  
奪ひゆと有りかくろの爲め患難モ有り  
も有りあきらめまつて一通のみ寫者ナニ  
狂歌つうりしたて川内川内川内川内  
及モさうが當川内川内川内川内川内  
水滅されますぐれどもひえまく

○命數に長短の定有り是師の云々と解天より  
給つて命數を教へる事の定め可といふと今  
當代より三十年と云定業す。余は世人より  
徳不應す。六十年未滿の凡と非業の凡と云  
あつれども。七年八十年の凡ね有る  
ありゆ。雖汝憂難。却而命教ふ  
有而短命にれども。爾ふ定業と侍  
生として死まうもの。是は善惡と云  
人の願ひより年より。持神佛衆生の為

万難行苦行者であらゆくもいふ。あら  
けふ。などんあつて其御恩とつらうりゆが  
あらず。只ひともうひとつの身の不定とゆき  
あすには。もよひは。名利名聞に駆入。位階  
權門喰。とのたゞりにかゝり。邪淫心のまゝに  
かゝりやあて位階權門のたゞり。諸人の追  
候輕蔑す。其身ハ勿論。諸人。益うよりん  
全銀万室とは。いゆ。慶事にして。序説の政  
務是と收。殊常。その爲へひそく。暇ひかくも  
まのつまでも。すき。是がちよ。定業す。

那葉と願子孫長久とさらふ子孫の衰微と願  
よりとなへてもヤセリ牛ハ敷シカドウ鼻ツメと  
トモトモとえハ是ナリが初モリワキハ高位  
の角ア追従輕薄とすらは諸人小恨ミと文  
例の衰微とす仲ケタナビトヨアツブ  
はととねとつるヒヨコアツレタムシテモ心  
メカクヒヤキアツバサシテアハムシテモ心  
鬼アツヅルアツスルトモアハムシテモ心  
薩摩ハムヒタリカセキシテモアハムシテモ心  
故ナル心アツマツハシアツカモシテ仕人ア

ち歌セウシガ定葉成ナハ長命キ子孫  
セ久キアリトヨリトカレトシトシケル貴トモ  
ルにはハラハ義誠の道と得ムチナハ我  
貴殿の小理少著セん哉

追加

師の道哥數十首残詠歎高則士鄙に生  
初リテモの修行に其身は抱うち文字もま  
言葉とは叶ハシムモシモ有ルトキアガ素ア  
ソリてみなもシテアラ後ノ都ナニシテ  
シキとシテ詠シ既リテうとナリシ

其つてすまえを學べあづくばその意に觀す  
世も道に入らぬ階様にとすんとねそひす  
不ゆきせんれどもくは  
能とすよとすよとすよとすよ  
ありぬるも神のうりうよ  
天しるべ佛か寧はつぬま  
ことほりが生くにやうじゆを  
神乃あかまくみそも辭不す  
誠りゆきまくまくありあまく  
國王ハ地の法をそむげむ

ねうぐまもと直にごくら  
強めにたつひくととかまくに  
ゆくはまとも天てのみゆく  
天の行地のけりが身をこりゆ  
に義教智がみらばす先代  
世の中にうちかみ形人アリモ  
多き事のゆゑたつとゆく  
自らとゆくあつてくもん  
神をいたしてくもん

まことに形をのへねりと思葉

無事佛西國事御人手に

まちかくはなづとゆきか

人手に身有利さんらうとあえぞ

わくももくはなづとゆきか

御御事御事人所すくみ

のつまびらて人波ノハニ

御御身みれんやモ残す連

逃とひりとかくたる先

鴻毛とすくめとすくめ

あらまよとみ、奥乃とぞりお  
多佐がそと代さざりゆ入ぬれ

おのむ法が奉法と云

おぬ子牛ぬぬまのとおほと

馬原比川が象とゆきとゆ

人食只曾に信ふとおこしむ

れまゆの金つゝいとおこ

りおとくとおこしむと

世事しげんあじとおこと

主之ゆゑにタハ立身ミナハ  
松風子ゆゆゆ伊ミトヒ來ル後  
神ノ事ナキトアリケンケル所  
人ノ言言行ソロヒギ至ル事  
多シ漁夫モ也酒井  
主之は在處と夫とめも也  
口モレム凡庸事あらニシカ  
何者夫のめ矣爪トアリ  
アリシニミカカワリ

心多事と清  
考りえむれつての只よ地  
おのづとくが日  
神よゑひうれじよ身あま  
御よふ身はまらふるな  
宮殿のそばか  
うゆの便びたるふ  
傳傳神あ  
行白法みよ  
神不<sup>ト</sup>う  
行<sup>ト</sup>う

おもへとよきをやんの心

せの半に半八と力も中年

もれぬよもうと名

死ふと道あるにまつまつ

かすねにせまのまつまつ

人とのうちをゆらうが

いのちのゆめゆめとよ

思ひを知れやかくにほりと

て死りもとむとみあて

かきむのこよどむねやうで

人よけのよきとよきとよ

海のよけのよきとよきとよ

世のよによきとよきとよ

つよしとよきとよきとよ

天の神とよきとよきとよ

おはよとよきとよきとよ

天下とよきとよきとよ

りとくすをもるる  
その中にはに苦とあらう無む  
てせりゆと苦のゆと  
人をもる指のたうにすまよ  
すじうくゆとあごにまくし  
云やすわらつゆとんめよ  
まくはうあよまんえいの  
國王のゆめの思とゆきくは  
うくうくあ浅字す  
天皇のゆめをまとねる

中身の福と一聲のうれしきよ  
まさんへむけりみどりのゆ  
すくのそまくとみくとわまく  
そめにひとみせんとあまく  
ゆのあつともやが身うどあ  
さくはくゆめのゆくへなれ  
ひのふゆとあくへなれ  
ひのゆと神にかまうとあく  
佛へまほせねばづぬまの

神をなすと云ふとやもれ  
そともひみどりと云ふ神通  
天乎又地乎かくとねどく  
すれの身とやまうる所  
人乎は天地の法と云ひゆ  
こもきとソウシトモも  
云乎にあそびと云ひ  
天のなるをいとぞやうば  
此雲遙きわざのそとをなせり

あがりよのやうへておひ  
天下を岸かうかぬるにはくゆ  
うかのくもつもゆく拂へ  
せのれにむかへしのゑ悪  
かと佛とあらゆまとも  
天をめのこなすと尋ねまく  
きをかくやうやうけんを  
其せ夏やうた西法なりしを  
かくと云ふ法と云ふも  
下に法と云ふ方法有り

西風うき風あそびの角  
すくはるぬせ代わざくまくと  
おれの流とよしもとくと  
人手にそぞんわいすもやさつと  
かがみの傳とがくとくまくと  
すくはるぬせ代わざくまくと  
ひく善法と法めくとく  
神波乃かくゆのがくくとく  
むくみだ風とて風空とよ  
さゆ中にゆく風とくまくとく

うくはるぬせ代わざくまくと  
やまくの風あそびの角  
くもとくとくとくとくとくとくと  
人手の風うくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくと  
その中にまぐらのとくとくとくと  
うれのとくとくとくとくとくとくと  
その中にとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくと

いのりはまよ神をほそん  
ゑてまよ神のゆゑよまよつ  
まよとまよのこ月くはまよも  
天子、將はキホリモア  
ねはつてあらりけ  
やうちをみせりぬまのあを  
まよとめにまわんのあを  
まよとめにまわんのあを  
まよとめにまわんのあを  
まよとめにまわんのあを

まよ思すてまよらへまよ  
まよほりまよあまよてれ其神と  
南無と唱て神を細文よ  
神佛聖人まよまよまよ  
まよまよまよまよまよ  
まよまよまよまよまよ  
まよまよまよまよまよ  
神佛聖人まよまよまよ

あらわすが如きをもとめんとす  
世の事に假りてはまつたるの  
ことさへあるとぞす  
神代はこそ名をあらわす  
れどもあくまでも在りて  
おもひのめしとぞ在りて  
おもひのめしとぞ在りて  
おもひのめしとぞ在りて  
天のそく地の徳めがめの二萬と  
さうしてうがおもつまじふ  
善き事とぞあらわすよ

すみやかに善業ありたり  
此水がれえのまことに善業  
かづみまことがまなりま  
日天皇石とに善のあきとま  
りがれいりうすくま  
云の中にはよ師匠あらわす  
あらわちうて内やまとくさむ  
云の中には無より生を せりあ  
育にゆきとこううんくよ  
ゆうとぞいんじをあらわすよ

たる事りかんとせよ

即ち是師固も亦も下さる  
わすれども此代と云ふ  
此世の事も爲めに  
もあらゆる聖人とも云ふ  
ありて是國と曰ひてはこれ  
に爲めに也、  
天をのみと爲りて能く之を  
いふ事も外へ表す  
口神ともいふので

今御身は直に破文よ  
西をの方傳へまつてゆき  
物のいじめのさんあつてあ  
一木と板をもとがり  
此一木にして大法と云  
弦といたがたとつ事あつて  
有らぬことを説くと云ふ  
神主をうぶの事と有る事と  
有る事あるがん乃神と  
本末とあれば是と有る事と

未年三月御二ツハ廿日  
て地火るがちうてうら  
信佛地法とすとまゆる  
やうりやのえの根元

ゆとはにあ生滅のゆゑ  
まくはゆゆゆゆゆゆゆ  
まくはゆゆゆゆゆゆゆ  
まくはゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
神佛お心事まゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

W. M. H. Döbber  
Haus und Hof zu Lübeck

18. Februar 1812.

